

<目的>女性にとって外に出て働くことは今やめずらしいことではない。近い将来労働力人口が減少に転じることから、女性労働力は政策にも掲げられているほど期待されている。が、果たして女性の働き方は時代に合わせて変化しているのだろうか。女性労働者の登用を考えるには、労働の供給側の女性労働者の実態と、需要側である企業の両者の分析が必要となろう。本研究では、女性の職業の大きなウェイトを占める事務従事者に注目し、中でも男性中心の職場である銀行業で働く女性に焦点を絞った。そこで、①女性行員と男性行員との間に登用の差があるか、②女性行員のコース別採用制度は彼女達にどのようなメリット、デメリットを与えているか、などを明らかにする。

<方法>女性行員と銀行人事部のききとり調査を行った。調査期間は92年11月から93年1月。またこれらの女性行員のキャリアが同世代の男性と対比してどのような差があるかを見るために銀行の男性行員数人にも聞きとり調査を行い、男女間でのキャリアの相違、就労観などの比較をした。

<結果>①性差による登用の差よりもコースの差による方が大きい。1つの種類の仕事の内容自体はむしろ平等である。一般職は専門的に長く1つの仕事の経験を積むのに対して、総合職は女性であっても幅広い仕事経験を積む。そのために長期勤続の女性行員で子育てをしながらという人は非常に少ない。②コース別利用によって一般職、特に長年働き続けている女性の昇級のスピードが遅く、頭打ちになっている。転換制度があっても利用者は限られており、採用時点での選別によりかえって転換は難しくなっている、等がわかった。